

Title	近代朝鮮をめぐる国際流通の形成過程-アジア域内市場の中の朝鮮植民地化-
Author(s)	石川, 亮太
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/876
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	石川亮太
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 17455 号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	近代朝鮮をめぐる国際流通の形成過程—アジア域内市場の中の朝鮮植民地化—
論文審査委員	(主査) 教授 片山 剛 (副査) 教授 桃木 至朗 助教授 青木 敦

論文内容の要旨

本論文は、序論・結論の2章を含めて全6章から成る。まず第1章序論は、1876年の開港以後の近代朝鮮をめぐる国際貿易を検討するための視角として、従来主流であった国民経済の存在を前提とした二国間関係史的な視角、特に日朝関係を重視する視角に対置して、近年の潮流である「アジア交易圏論」——自由貿易体制移行後のアジアには有機的な域内流通の構造が成立していたとする見方——を提示し、この後者の視角から、開港以後1910年代までを対象に、朝鮮が如上の域内流通の中に組み込まれてゆく過程を考察することを表明する。

第2・3章は、開港～日清戦争期に、朝鮮開港場で活動した日本人商人と中国人商人（以下、華商と呼ぶ）の活動を検討する。第2章は、中国を最大市場とする加工海産物（煎海鼠・鱻鱈・干鮑）の流通機構を、朝鮮開港後、日本人漁民の出漁等によって増大した朝鮮産加工海産物に即して跡づける。具体的には、釜山の日本人商人の動向を、加工海産物のノウハウを有する長崎華商と関連させて検討する。第3章は、ソウルを拠点にする有力華商、同順泰の経営文書を活用し、1894-95年の輸入貿易の実際を、当時の朝鮮をめぐる汽船航路や外国為替網などの貿易関連サービスが日朝間を中心に構築されていたことと関連させて検討する。そして個別商人の活動実態に着目するならば、華商の活動は中朝二国間では完結しておらず、日本を含む広域的な取引網のうえに成立していたこと、また朝鮮開港場の日本人商人には、華商通商網への依存を通じてアジア域内流通に参加するという選択肢もありえたこと、等を論じる。

第4・5章は、統一的幣制が未確立であった朝鮮・中国における国境を越える貨幣流通のあり方を、時期としては日清戦争後から韓国併合後の1910年代まで、地域としては朝鮮東北部の咸鏡地方と中国東北部の「間島」地方の2地域を対象に検討する。第4章は、咸鏡地方でロシアのルーブル紙幣が流通した要因を、咸鏡地方の開港場である元山に華商が進出し、当時ルーブル紙幣の受領性が確立していた上海へ現送するルートができたことと関連させて探る。第5章は、間島地方では発行主体を異にする種々の紙幣が流通し、小額紙幣と高額紙幣との間に季節的な需給変動が存在していたこと、当地域の華商が地域外との裁定取引により間島内の貨幣間需給調整を行っていたこと等を明らかにし、さらに1917年頃から日本円系の朝鮮銀行券が大量に流入した要因を、華商による如上の調整機能と関連させて推測する。

第6章は、前章までの検討を踏まえ、開港期朝鮮の国際流通は一国単位ではなく、様々な商人グループ、特に華商の多国間・多地域間の商業活動の重層として捉えるべきことを、また20世紀以降の日本による朝鮮経済の領域的支

配の進行は、それまでに形成されていた東アジア域内流通との関係を考慮しつつ検討する必要があることを指摘する。

論文審査の結果の要旨

本論文の評価されるべき最大の点は、近年の日本における経済史学界が日本・中国・東南アジア・南アジアを対象に構築してきたアジア交易圏論の視角と分析手法を咀嚼したうえで、従来、真正面から取り上げられることのなかった近代朝鮮における国内・国外の商品・貨幣の流通、および流通を支える航路・金融等のサービスの特質について、日本・中国・ロシア沿海州をも視野に入れて定位する研究を開拓したことである。

具体的には、第2・3章における朝鮮産加工海産物の流通の検討から、従来、対立的なイメージで理解されていた、在朝鮮日本人商人と長崎華商との関係を、時に相互依存的に協力しあうものであったことを実証した。また、ソウル大学所蔵の朝鮮華商の経営帳簿を発掘・分析するという、韓国は勿論、世界でも数少ない試みに挑戦し、朝鮮・日本・中国の華商を結ぶ取引網の存在を具体的に解明した。第4・5章では、朝鮮東北部と中国東北部の2地域それぞれにおける、重層的貨幣構造および国際的貿易決済システムとの連関構造、地域内決済貨幣と地域外決済貨幣との交換を媒介する華商の金融活動の存在等を実証し、当該地域に既存の流通・金融構造の「非国民経済」的特質が、その後の日本による朝鮮銀行券の流通を可能にした点を論じる。

これら新鮮な事実と論点は、朝鮮のみならず、近代における日本を含む東・東北アジアの物流・金融の形成・変遷を考えるうえで、いわば「非国民経済」的要素の重要性に改めて留意を促す点で、また近代日本の商人像を相対化する点で、高く評価できる。

本論文がもつ問題点としては、まず、統計数値やグラフの整理・分析に当たり、より周到的な整理・分析が求められる点がある。また、第3章で分析された朝鮮華商の同順泰が、果たして朝鮮華商の典型であるのか、それとも例外的存在であるのかを確認したうえで、朝鮮・日本・中国を結ぶ華商取引網の評価を行なうべきであろう。さらに「強制された自由貿易」という概念の近代朝鮮への適用など、本論文で使用される概念については、より慎重かつ具体的な検討が求められよう。

しかし、これらの瑕疵や期待は、本論文が達成した成果と意義を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと認定する。